

老年期における表示の明視性の研究(4) - 表示方法の提案 -

大妻女大 ○吉岡徹、岐阜教育大 中野刀子、椋山女学園大 加藤雪枝
 名古屋女大 柴村恵子、岐阜女短大 道家とき、文化女大 飯塚弘子
 大妻女大 齊藤啓子

目的 今回の一連の調査の結果、文字表示の見える範囲、楽に見える範囲が、老年期には個人差が大きく、また表示の色と背景色の組合せでも大きな差があることが認められた。日常生活に見られる各種表示の実態と比較し、問題点を明らかにすると共に、より見やすい表示のあり方を提案する。

方法 家電製品に代表される耐久消費財や日用品に見られる表示・マーク及び取扱説明書の文字、銀行・郵便局の通帳に使われている文字、新聞や各種広報誌の文字等について調査結果と比較検討する。

結果 今日の家電製品本体は黒とか灰色の製品が多い。表示部やコントロール部も黒や灰色の場合も多い。表示の内容を赤、青、黄など色で区分する例も多く見うける。背景色に対して表示色の明視性の違いが今回の調査で認められたが、実際の表示・文字の大きさは一律であり、色の組合せによる明視性は考慮されていない。製品デザインもシンプルさをねらい表示・文字は小さく、ひかえめにする傾向にある。老年期のユーザーにとっては不親切なものが多い。日用品に義務づけられているが、その多くは知らせるとか、分からせる努力に欠けている。金融機関の定款の表示・文字は老年期の人には伝達不可能である。公報誌等の中で高齢者を対象とする情報は、楽に見える大きさの見出しと、見える範囲の書体でないという意味をなさない。入浴や洗顔に関する用品の説明はメガネなしを前提に考えられねばならない。老年期を対象とする表示は、文章の簡略化計つても文字を大きく扱うと共に、色の使い方の工夫が必要である。